

沖津先生がなくなってしまった

信州大学理学部 島野 光司

「おい、島野、5時だぞ」。はい、と声を上げて立ち上がる。沖津進先生は千円札を数枚出されて、「いつもの様に、適当に」。坂を降りて、食料雑貨店でビールなどのアルコールを買い、つまみは焼きそばなどを研究室で作って大皿に盛る。そんな日々が千葉大園芸での私の修行時代であった。

その沖津先生が咽頭癌でなくなった。平成28年(2016年)2月26日、61歳であった。私個人に、沖津先生の人となり全体を語る能力はない。私が語れるのは、自分が実際に接した沖津先生のごく一部の側面だが、それを語ることが沖津進という人を伝えることになればと思い、筆をとる。

研究テーマ：自分で選ぶ

大学(院)生に、研究テーマは自分で考えさせるのが沖津流だった。現在、大学や研究所の多くで教員やプロジェクトリーダーが研究テーマを持ち、科研費やプロジェクト予算を抱え、その研究を学生に手伝わせる“指導”が広く普及している。これには、利点も欠点もある。iPS細胞などの研究では、研究全体を俯瞰できるプロジェクトリーダーがいて(必要で)、その下で各研究者が、与えられたそれぞれの役割を果た

す。リーダーはそれらを総合して、プロジェクト全体の高みを目指す。そうしたやり方だ。だが、沖津先生は、自分のテーマを学生に「やらせる」ことはしなかった。似た興味をもつ学生や学外研究者とフィールドに出て共に研究をすることはあっても、学生がテーマ探しに困っている時には、その学生の関心をよせる内容に合わせて該当分野、関連分野のトピックスを紹介し、学生のテーマ選びの思考を手助けされた。だが、決して、自分がテーマを与えて、それを完了すれば卒業、と言った研究指導はされなかった(そもそも適当に言われたことをやって、卒業、就職できればいいという学生はこの研究室には入ってこなかったのだ)。「お前、わざわざやりたいことやりたくて生まれてきたのに、他人に言われたことだけやったって、お前の人生、しょうがないだろ」「お前がやりたいことやらないでなんの人生だよ」細かな文言は覚えていないが、そうした趣旨の発言を、独自の節回し、いわゆる「沖津節」で伝え、学生らを見守った。そうした発言の多くは飲み会の席で、互いに飲んでいる時の言葉にもかかわらず皆の記憶に残っているのは、それが本音で、心に響いたからだろう。上記の沖津先生の方針は、今、私が引き継がせていただいている。



1990年8月17日 長白山 ご自身の撮影

実戦・体験学習

沖津先生ご自身がアルコール飲料をお好きだったこともあり、我々弟子、被指導学生らは様々な機会に、様々な飲食店に連れて行っていただいた。色々あったうち、私からはフィリピン・パプのエピソードをここにつづりたい。ここでまず指摘しておかなければならないのは、フィリピン・パプが決していかかわしいところではないということである。オープンな席で、フィリピンから来られたお姉さんたちにウイスキーの水割りを作ってもらい、楽しく会話をしながら飲むところだ。さて、沖津先生がそうしたところに私を連れて行かれたのは、実践教育のためでもあった。フィリピンは旧宗主国がスペインでスペイン系（ラテン系）の名前の方が多いが、第二次世界大戦後はアメリカの影響下にあり、島によって違う言語の共通語として、英語を話せる人が多い。日本に来られる方はなおさらだ。そこで私は、フィリピンのお姉さんたちとすべて英語で会話をさせられた。飲み物、つまみの注文など、大学の授業などでは決して教わることない英語、実践英語を身につけさせられた。ある時、沖津先生の手持の現金が足りないことがあり（お姉さんに「センセイ、フルーツ頼ンデイ？」と聞かれば断れないのだ）、私も少ないながら料金を払わせていただいて、「Give me the change（お釣り、私にください）」などと言葉をかわしたことを覚えている。時にはお姉さんのダンスタイムに「おい、島野も踊ってこい」とサジェッションのもと、“May I join...”等と言って踊ったりしたこともあった。「何だ、島野、結構踊れるじゃないか」私は、海外に行くことなく、こうした実践英語や交渉術、ある意味でのサバイバル術を沖津先生の“指導”のもと、身につけさせていただいた。まさに松戸“駅前留学”である。こうしたことは沖津教育哲学のもとに行われており、学びは実践（実戦）で、かつ楽しみながら学ばなければ身につかない、というものであった。研究においても、教育においても“フィールドワーク”を大切にされてきた。これぞ沖津流、であった。

自立

また印象深かったのは「早く俺から独立しろ」といった教育方針だった。学会誌にデビューしたのは1993年、これは卒論の内容に追加調査をして日本生態学会の和文誌、続く2本目も修士論文を元にした内容で生態学会誌だった。これらは、私と沖津先生との

2名の連名であった。博士課程に進むと、私は学外の大学院生と自腹（研究テーマは自分で決める分、遠征費用は常に自腹であった）で共同研究を始め、ブナ堅果のネズミによる摂食を雪が妨げる話で日本林学会誌に論文を投稿したが、その時には、原稿に目を通してくださり、アドバイスもくださったのだが、「俺の名前入れなくていい。お前らの名前で発表しろ」と、大学院生である私の自立を促してくださった。これは大学における今の私の教育方針にも影響を与えていて、信州大学准教授である私は今、学生にはテーマを与えず、自分でテーマを考えさせ、私はそれをフォローする立場に専念している。そうした研究論文を学会誌にだそうとすれば、自分の専門の分野外、常にアウェイの立場ではあるが、それが学生、若者を育てる道だと考えている。

また、私が大学院時代のころ、俺と飲むな、ということもあった。生態学会などの大会の懇親会でのことで、沖津先生を見つけ合流しようとしたところ「俺と飲むな」と一喝。どういうことかといえば、日頃は俺と飲めるのだから、学会では他所の^{よそ}人と飲んで、なるべく人脈を作るように、とのことであった。「名刺代わりの別刷りだ、配ってあるけ」飲み会中に別刷りももらった方も困るのではないかと思うが、確かに相手の印象には残る。^{うぶ}初で真面目な当時の私は、実際にそうしていた（笑）。今なら嘘え話だとわかるのだが、だが、これも、早く俺から独立しろ、という弟子を思っ^ての沖津流指導であった。

同様の意図からであろう、千葉大園芸の私が千葉大理学の^{大沢研}のゼミに参加するのを許していただいた。他の研究室のお世話になるといった場合、かつて師弟関係だったり、同門で学びあった兄弟研究者の研究室が多い。あるいはその時々^の共同研究者の部屋か。沖津先生は館脇学派、大沢雅彦先生は沼田眞研究室を引き継ぐ方なので、前述のような関連も無ければ共同研究もない研究室間でのことである。もちろん大沢先生の許可をいただき、週一回、沖津先生や私が日頃いる松戸キャンパスから、私が教養時代に世話になった西千葉キャンパスに通った。研究室、指導教官が変われば、メンバー、雰囲気はもちろん、ターゲットになっている研究目標も違っており、自分の所属する研究室とは異なる内容を、大学院生の先輩諸氏の研究からだけでなく、論文紹介などから学ぶこととなった。私としても、松戸（園芸学部所在地）から西千葉（理学部所在地）に出稽古する立場上、あまりに無知

で恥ずかしい態度は取れない。毎週、適度な緊張感を持って参加させていただいた。私が思うに、自分（教員）の弟子を他所の研究室に通わせるようなことは、相手方の教員に借りを作るようで、あまり好ましいものではないと考える教員が多いのではないか。しかし、学生（院生）の後の就職やキャリアを考慮して、こうしたことを許していただいたことは、沖津先生の弟子である私に大きなプラスとなった。研究室が違うのだからゼミ発表の内容がわからないのは当然で、しかしそうした状況でも臆せず「すみません、聞き逃したと思うんですが...」「この分野は素人なので教えていただきたいんですが...」などと聞けるようになったことは大きい。以後、学会発表でもわからないものは恥ずかしがらず聞けるようになり（教えて君キャラになってしまえば楽だろうという部分もあるが）、自分の発表時にも過度に緊張せずに発表をできるようになった。実はこれが沖津先生のおかげなのであった。

論文指導

私が学会誌に論文デビューしたのは、1993年の生態学会誌だった。卒業論文をベースに、修士1年の夏、追加データを加え投稿したものだ。最初の校閲結果はバツ（リジェクト）。当時は何がどうだめなのかわからず困惑した。今ならわかる。太平洋型ブナ林の一つの山で、現在ブナの後継樹が少ない原因を江戸時代の小氷期問題に絡め、太平洋型ブナ林の植生帯の議論までやろうとしたのだ。少しばかりのデータで遠大なストーリーを語るというもので、まわりから見れば「あいつらは山師」、臍目に評価しても「目標は悪くないが、話が遠大でバランスが悪すぎる」といったところだ（沖津先生ご自身は、「地理学評論」や「地学雑誌」「第四紀研究」などに論文を残し、地理学の分野でもご活躍されてきたため、そうした理論展開は嫌いではない。むしろ好き）。査読結果を沖津先生の部屋で聞かされたのだが、一通りの説明を受けた、「島野、これはものすごく三角に近いバツだから、いける。相手の指摘している所をすべて直して、俺のところを持って来い。一週間だ」。私は頭のなかで想像した。丸に近い三角形はイメージできるが、三角に近いバツとはどんな図形であろうかと。

ともかく対応した。この時は幸い査読者の指摘が明確だったのと、その指摘の意図する所を沖津先生が解説していただいたおかげで、一週間で修正原稿を完成

させ（内容、特に遠大な考察は大きく削除）、編集部に戻送。その後も一筋縄では行かなかったが、1993年に出版にこぎつけた。あの時、バツの判定のまま諦めてしまえば今の私はないし、研究室で後に続く博士号取得者も出なかったろう。非常に熱い「現場」を経験させていただき、実践（実戦）で論文の投稿の仕方を学んだ。論文の投稿の仕方というのは、投稿するまでよりも、投稿後の対応が大切で、バツをなんとか三角の評価に持っていか、三角に見ていただいたものをどうやってマルに持っていか、である。余分なプライドを捨てる、相手の考えを受け入れる、論理的整合性を整える、相手に理解してもらえる表現を行うといったことを教わった。「そりゃ島野の方が詳しいだろうよ、お前はいつもこの問題ばかり考えているんだから。だけどそれを相手にきちんと伝えないと意味ないんだよ」「レフリーが詳しくなくてもいいんだよ。査読者は読者の代表で、誰が読んでも理解できる論文を書くんだよ」そのうえで「わかりやすさねらいだからと言って、つまらない論文は書くな」と笑いながらおっしゃっていたことを思い出す。

後年、私が学位を取得し、千葉大を出た後のことだと思う。二人で杯を酌み交わすことがあった。

島野「先生、レフリーで具体的なことを書かないで、抽象的というか... どこをどう直せばいいのかわからない査読ってありますよね。ただダメ出しとか」

これは相談というより愚痴の範疇だ。

沖津「まあ、うまくやるしかない。それより島野、お前がレフリー、バンバン引き受けるようになって、著者が何をどう直したら論文が良くなるのかを端的に伝えられるようになればいいだろ。良いレフリーの見本になるんだ。年間10本ぐらい見てやって、論文通して若い著者をバンバン育てていけば、そいつら、将来の査読者が育って、世の中少しは変わるだろ」

島野「年間10本も見たら、自分が潰れちゃいますよ」

沖津「(フフフ)」

口は悪いが、そうした発言の内容は、沖津先生ご自身が査読や編集者としてのハンドリングの際に心がけていることであつたらう。そして、年間10本なんて、ヘーキで対応していたはずだ。

ローテクノロジー・フィールドワークの標榜

「ハイマツの調査は、折尺一本」

「ゴムボートで川を下りながら双眼鏡で植生調査。これで国際誌」

飲んだ席ではそうしたことを楽しそうに語っていた。南・沖津共編 2007「ベーシックマスター 生態学」オーム社では「フィールドに出るということ」という章を書かれ、その章のキーワードの一つに「ローテクノロジー」をあげ、フィールドワークにおいてはローテクノロジーだけでも十分な研究成果を残すことが可能であることを述べられている。同時に十分な洞察力を発揮することが重要であることを述べられ、100人の研究者がいれば100通りの意見がありえ、生態学は自分のオリジナリティーを存分に発揮できる分野であることを述べられている。この章での他のキーワードを挙げておくと「フィールドワーク」「作業仮説」「読図力」「調査計画」「洞察力」「フィールドバック」「文献ワーク」「概査」「危機管理」「オリジナリティー」で、まさに沖津生態学のキーワードそのものである。

前述の言葉は、“事の本質を見ぬくのは機械ではなく自分の目である”、“機械の測定値に惑わされて本質を見失ってはいけない”ということの、沖津進一流の表現だ。加えて測定機器によらず、自然を見る目を養えば、あるいは学生時代に身につけておけば、それは一生の財産になるし、大学を出てからでも自然... 森羅万象を楽しめる、そんなメッセージなのだ。

千葉大学医学部附属病院の沖津先生の病室を私がたずねたのは、平成27年(2015年)6月16日の事だった。朝、松本から「あずさ」に乗った。面会は午後2時から。私は何の連絡もせず、いきなり部屋をたずねたのだが、たいそう嬉しそうにしてくださり、歓迎していただいた。ベッドで横になっているものと思えば、デスクに向かい、論文だか本原稿を執筆されていた。曰く「いや、暇でさ」。

互いの近況、研究、学生、業界のことなど言葉を交わした。喉の手術の前のことだ。他愛のない話もお聞かせくださった。

「いや、さ、最初に見てもらった病院(都内大病院)で急遽入院することになったんだけどさ、学長に知れて、『なんでこんな所にいるんだ』って、ばれちゃってさ、千葉大病院に移ることになったんだよ」

「東大、慶大、千葉大医学部、ですからね」

「で、こっちに移ったんだけど、ある時学長がみずから面会に来られたわけよ」

「光栄ですね」

「それがさあ、こっちはそうとは知らないもんだか

ら、その時、点滴スタンド押しながら院内をぐるぐる散歩してたんだよ、部屋を出て」

「ありゃ、やっちゃいましたね」

「大騒ぎだったよ。会ってからもバツが悪いし」

「フロアの看護師さんたち、慌てたと思いますよ」

ご自分の原稿作成にお忙しい中、私が投稿者として関わった植生学会誌の論文も読んでいただいていた。

「島野、チョウはどうしたんだよ、チョウは」

「チョウですか？」

私がノネズミやノウサギを扱っているのは先生もご存知だったろうが、チョウ群集は意外だったのかもしれない。

「学生に昆虫少年がいるんですよ。偶にですけど。私が植物を教えて、学生からはチョウを教えてもらって... ってやるんですけど、査読が大変で。何せこっちは素人ですから。本人は卒業しちゃってなかなか連絡取れませんし。いや大変でした。でも査読者に恵まれて、的確で具体的な指示をいただき、なんとかしていただいた、って感じですね」

沖津先生は嬉しそうに頷いていらした。こうしたことが、沖津先生に対する恩返しになってくれたのであれば良いのだが。

時計を見ながら、ではそろそろ、と言うと、まだ良いじゃん、と私を引き止めてくださった。ざっくばらんに話をできる相手は、なかなか居なかったのかも知れない。最後に、と二人並んで私のカメラで「自撮り」をした。回復、退院の後、こんなこともありましたね、と二人で笑えるように。だが、後日、その写真を探すのだが、どれだけ探しても出てこない。私の場合、フィールドワーク唯一の武器が(デジタル)カメラなので、画像の管理には人一倍気を配っているつもりなのだが。写真が消えてしまったゆえ、一層私の脳裏に焼き付いている。

2015年11月19日。千葉大園芸で沖津先生が特別講義をなさることとなった。すでに手術で声は失われていたが、沖津先生が作成されたパワー・ポイント資料をスクリーンに映しながら、百原准教授の代読で発表がなされた。内容は、当時、科学者にとっては前人未到と言っている、ロシア沿海州の奥地を、ロシア人科学者と調査した話だ。調査の話というか、ほとんど冒険である。ローテクノロジー・フィールドワークの本領発揮である。

発表後、質疑応答が行われ、沖津先生は投射台上の

白紙に返答を書く、筆談で答えられていた。沖津先生の肉筆がスクリーンに映し出される。いくつか質疑が行われた後、私も簡単な質問をさせていただき、お答えを頂いた後、余談ですが、と続けた。

「あのう、今日、怪我の功名で筆談させていただいているんですが、私、いや会場の皆さんも、久々に沖津文字を読むことができ、感激しています。今日は先生、丁寧に書いていただいていますけど、あの頃（自分が学生の頃）、原稿の上に書かれた文字は本当に解読困難で、先輩たちに助けてもらいながら読んだことを思い出しました」

沖津先生は笑いながら、スマン、スマンというふうには手を振り、投射台の上には「すみません」と書かれた。病身であっても、笑顔は忘れなかった。

発表後、廊下の沖津先生に声をかけた。先生は「あっちで話そう」というふうには手振りでおっしゃり、私は「先にトイレだけ行かせてください」とその場を離れた。戻ると沖津先生の姿は既にそこになく、周囲の人に聞くと、医師、看護師に囲まれ、車で病院に向かわれたとのこと。これが私が生前沖津先生にお会いした最後であった。

2016年4月29日、千葉大園芸で沖津先生の追悼シンポジウムが行われた。これにともなうモミ *Abies firma* の記念植樹の際、沖津先生と学生時代から親しくされてきた佐野先生、並川先生とお会した。以下は佐野先生のお話である。

(2016年)2月26日に藤沢の実家に帰る折、沖津に会いに行こうと思ってね、あいつが最近書いたアンデスの本、もらってさ。そのお礼もあって、26日は実家に行って、27日に沖津を訪ねようと思ったんだけど、だけど26日に亡くなったって聞かされて。あの時、羽田から直接千葉に向かっていけば会えたかと思うと、すごく残念でね...

記録(研究業績)にも人の記憶にも残る方であった。

雑誌「植生情報」の特集で、以前、植生学に影響を及ぼした先人たちを語って頂く特集を、編集委員の蛭間君と共に組んだ。その時、館脇先生とその学派のことを小島 覚 先生に原稿をお願いした(小島 覚, 2014「館脇先生の功績と思い出」植生情報 18: 8-11)。ここから最後の段落を引用したい。

“全国的な大学改革の流れの中で、北海道大学でも改組が進んでいた。かつての農業生物学科という組織は無くなった。館脇先生の直系の流れをくむ伊藤浩司

氏は、農学部から新組織である大学院環境科学院へ移籍、その結果、館脇先生の系流は農学部からは事実上消滅してしまったのである。だが、新しい組織に移った伊藤浩司氏の薫陶を受けた沖津進氏が、北海道大学ではないが、研究理念と言い対象地域と言い、日本では館脇学派の流れを正統的に継承している人物と言ったよいだろう。”

こうした流れと、沖津イズムを引き継ぐのが我々残された者の務めだと思う。

最後に沖津進先生の経歴を付す。生前、沖津先生ご自身が残されたものを百原先生が整理されたもので、引用元は沖津進先生追悼シンポジウム実行委員会編、2016年4月29日発行「沖津進先生追悼文集」である。これは、身近な関係者の多くが思い出を綴り、哀悼の意を記したものだ。この文集の存在もここに記して、残すこととする。

なお、以下の経歴に、学界における各種委員などの経歴ならびに受賞歴等は除いてある。

- 1954年 5月10日 福岡生まれ
- 1973年 3月 東京学芸大学附属高等学校卒業
- 1973年 4月 北海道大学農学部農業生物学科入学
- 1978年 3月 同学科卒業
卒業論文「天然サイトカイニンと合成サイトカイニンの葉緑素保持効果の相違について」
- 1978年 4月 北海道大学大学院環境科学研究科環境保全学専攻修士課程入学
- 1980年 3月 同課程修了
修士論文「ハイマツ帯の自然環境の成り立ちについて—ハイマツ群落の動態を中心として—」
- 1980年 4月 北海道大学大学院環境科学研究科環境保全学専攻博士課程入学
- 1984年 3月 同課程単位取得満期退学
- 1984年 6月 学術博士(北海道大学)
学位論文「Dynamic ecology of *Pinus pumila* community of the Taisetsu mountains, northern Japan with special reference to the establishment of the *Pinus pumila* zone. (原著英文: 大雪山ハイマツ群落の動生態学的研究—特に日本のハイマツ帯の成立—に関連して—)」(主査伊藤浩司)

- | | | | |
|-----------|------------------------------------|-------------|------------------------------------|
| 1984年 4月 | 千葉大学助手 園芸学部 | 2012年 4月 | 千葉大学大学院園芸学研究科緑地環境学コース長 (2014年3月まで) |
| 1989年 9月 | 千葉大学助教授 園芸学部 | 2014年 4月 | 千葉大学大学院園芸学研究科長 (2015年6月まで) |
| 2000年 4月 | 千葉大学教授 園芸学部 | 2016年 2月26日 | 逝去 (61歳) |
| 2000年 10月 | 第42次南極地域観測隊員 (2001年3月まで) | | |
| 2002年 8月 | 千葉大学学長補佐 (2004年7月まで) | | |
| 2006年 4月 | 千葉大学園芸学部緑地・環境学科長 (2007年3月まで) | | 連名を含む原著・総説 139本 |
| 2007年 4月 | 千葉大学教授 大学院園芸学研究科 | | 著書 21本 |
| 2007年 4月 | 千葉大学海洋バイオシステム研究センター長 (2011年3月まで) | | 報告 8本 |
| 2007年 4月 | 千葉大学大学院園芸学研究科緑地環境学コース長 (2009年3月まで) | | 書評・討論 4本 |
| 2009年 4月 | 千葉大学附属図書館松戸分館長 (2013年3月まで) | | その他 46本 |
- 駆け抜けるにしても短い人生であった。かの世界でも、フィールドワークを楽しまれ、そして少しゆっくりしていただければと、祈り申し上げる次第である。